

視点

千葉、茨城、そして埼玉

日刊工業新聞社 さいたま総局長 芦内 秀郎



今回、執筆の機会を頂いたことに感謝申し上げますとともに、この機会を利用して、これまでの地域経済・産業に関する、私なりの雑感、および3度目となる赴任地「埼玉県」における取材方針などについて述べさせていただきます。

私は98年に、日刊工業新聞社に入社し、最初の赴任地は、千葉県でした。周知のように、千葉県は外房と内房、それに内陸部で構成される地形。内房は、主に、鉄鋼や化学、電力などの素材・エネルギー産業が集積。外房は、農漁業や観光産業が、内陸部には、東葛（柏市など）、成田、かずさ（君津など）の地域に、機械や食品産業など多様な産業が立地しています。

また、内陸部は、大手の出先工場が多数立地している内房地域に対し、地場の中小企業で形成されているのが特徴的です。

特徴的といえば、千葉県産業の場合、自動車や家電工場がないことから、下請け・協力会社は少なく、代わりに、ニッチ市場を開拓したり、その分野のオンリーワンやナンバーワンの中小企業が散見されます。

こうした産業構造の中で、約4年間にわたり、産学官それに金融を含めたシンポジウムを定期的に開催するなど、4者の連携を進展させる取材に注力しました。

赴任当時は、中小企業創造活動促進法や経営革新法などが施行され、わが国の中小企業政策が、それまでの“保護・救済”型から“自助努力”型に移行する時期だったこともあり、行政担当者に地域の中小企業を紹介したり、中小企業経営者に行政の活用を勧めるなどの舞台づくりに注力しました。

そして、03年、千葉から茨城へ。茨城県に赴任した時、あまりにも千葉県の産業構造と異なることに、一種のカルチャーショックを感じました。

茨城県産業は、大手の出先工場に対して、多くの下請け・協力中小企業が、いわば、群れを成していたからです。ご存知の方が多いと思いますが、茨城県は日立製作所の発祥の地であり、多くの中小企業が同社の仕事に関係しています。

したがって、地元では「日立が風邪をひくと、地場企業は肺炎になる」といわれたほどです。茨城県産業を通して、わが国の産業構造を見た思いがして、いい勉強になりました。

このため、茨城県ご当局と連携して、同県に立地する大手企業の幹部（資材部や研究開発部など）を招き、中小企業のビジネスチャンスを探る場を設けたり、県内中小企業間の受発注を促進するシンポジウムを開催するなど、多様な事業を積極的に提案・実行しました。

今度は、埼玉県です。赴任して、早くも3ヶ月が過ぎました。この間、埼玉県には、千葉県や茨城県とは異なる産業ポテンシャルを感じています。

ホンダなどの自動車産業があり、全域にわたって、技術開発・知識集約型の中堅・中小企業が見受けられます。

余談ですが、弊社におけるさいたま総局は、埼玉、群馬、栃木、茨城、千葉、福島県などを統括する北関東支社および産業人クラブ（設立当初は工業人クラブ）の発祥地であり、今日にわたり、その重要性は変わりません。

したがって、これまでの経験・ノウハウなどを有機的に機能させ、加えて、これまでに培った人脈をフル動員し、産学官・金の連携はもとより、地域にあった新産業の創造などに役立つ拠点になるよう、全力を投じる構えです。

前任者に引き続き、ご支援、ご指導を、お願い致します。